日本音楽即興学会
第6回学術大会

大会テーマ：『楽器』による即興、『楽器』によらない即興

日程：2014年12月13日(土) 14日(日)
会場：京都精華大学 友愛館 多目的ホールAgora
〒606-8588 京都府京都市左京区岩倉 木野町137

もくじ

03　ごあいさつ

04　プログラム

06　研究発表１～３

09　基調講演　Haco（大会ゲスト）

「音の観察と声のゆくえ」

'The Extraction of Sound and the Voice'

10　ラウンドテーブル

11　研究発表４～７

15　特別講演　大野 松雄（大会ゲスト）

「即興　現在から未来へ」

'Improvisation from Now to the Future'

16　演奏発表

17　研究発表８～９

19　設立趣意

20　入会のご案内

21　journal 投稿規定

22　会則

23　大会実行委員会・学会役員・委員

ごあいさつ

日本音楽即興学会（JASMIM）の大会も第6回となりました。
学会設立当初から，少しずつではありますが，着実にその歩を進めてきました。会員も増加傾向にあり，音楽即興への関心の高まりがうかがえます。
これまで，「即興」とかかわりのある幅広いテーマを設定し，会員・非会員を問わず，様々な分野で実践・研究を行う皆さんで議論を深めてまいりました。今大会のテーマは，「楽器による即興／楽器によらない即興」です。このテーマを考える上で避けて通れないのは，「楽器とは何か」という問いですが，これは「そもそも私たちが『楽器』だと思っていたものは何だったのか」，「即興において『楽器』はどのような意味を持っているのか」といったこととともつながる，広がりのある問いです。ゲストのお二人はもちろんのこと，今大会に参加される皆様一人ひとりの実践・研究と照らしながら，思う存分活発な議論をして頂ければ幸いです。
会員からの発表は，研究発表9，演奏発表1，ラウンドテーブル1が予定されていますが，これまで同様，実に多種多様な分野に関わっています。一見あまり関係なさそうな分野どうしが〈即興〉を介してつながっていくことは，本学会の発展を予感させる兆しのように感じられます。各発表は，私たちに新たな知見をもたらしてくれるだけでなく，新たな問いをも投げかけてくることでしょう。一緒に考えていきましょう。
最後になりましたが，落晃子委員長をはじめとする大会実行委員会の皆様，会場を提供し，助成金を交付してくださった京都精華大学，各ボランティアの皆さん，今大会を支えてくださったすべての方々に，心から感謝申し上げます。

理事長　寺内大輔

ごあいさつ

今回のゲストのお一人、音響デザイナーの大野松雄さんは、日本初のテレビアニメである「鉄腕アトム」の音響効果を担当されたことで知られています。
大野さんは、1963年当時誰も聞いたことがなかったであろうロボットの足音の制作にあたって、マリンバの演奏音をオープンリールテープに録音し、手で再生スピードを変化させ、ポヨポヨという独特な音を生み出されました。
アトムは鋼鉄で出来ているロボットであるにもかかわらず、敢えてかわいらしい音を作り出したのは、きっと未来のロボットは、より人間に近い、やわらかい新素材でできているだろう、という想像からでした。大野さんはアトムの足音に、未来への希望を織り込んだのです。近年では、故レイ・ハラカミさんや大友良英さんなどとともに、オープンリールテープデッキによる作品制作や、即興演奏を精力的に行われています。
また、もうお一方、サウンドアーティストのHacoさんは、走行する電車内でのパフォーマンスや、植物とのコミュニケーションとして電子音楽を探求する「バイオテック・オーケストラ」、歌、楽器アンサンブル、電子音、電磁波ノイズ、環境音などによる作品制作や即興演奏など、多岐にわたる音楽活動を国内外で展開されています。
大野さん、Hacoさんお二方の、「楽器」ではない多様なツールにより奏でられる、「楽音」ではない音による演奏からは、従来の楽器を超越した音楽・音響世界を感じることができるでしょう。
今大会の発表者数は、当学会大会で過去最高数となりました。発表者のみなさんによる多種多様な演奏やご発表を通して、新たな音や演奏行為に触れるのみならず、未来の音楽について思いをめぐらせるきっかけとなりましたら、これ以上の喜びはございません。

第６回大会実行委員長　落 晃子

日本音楽即興学会　第6回大会(2014年度)プログラム

12月13日（土）

12:00-14:00　受付

13:00-13:50　総会（学会会員のみ）

14:00-14:10　開会挨拶

14:10-14:40　研究発表１　・・・

The 6th Annual Meeting, programme

Sat 13th December

12:00-14:00 Registration

13:00-13:50 AGM(members only)

14:00-14:10 Opening Words

14:10-14:40 Research Presentation 1 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ Noriyuki TAKAHASHI
' The ability of jazz players in music listening'

14:45-15:15 Research Presentation 2 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ Haruna MYODO
'Action Research for Learning of Creative Music Making: Musical Improvisation in Elementary School'

15:20-15:50 Research Presentation 3 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ Daisuke TERAUCHI
'John Zohn's Game Piece "Cobra": Its Concept as a Musical Work'

16:05-17:35 Keynote Speech ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

研究発表 1

【タイトル】

「ジャズ演奏者の音楽聴取技能」

'The ability of jazz players in music listening'

【発表者】

高橋 範行　／　Noriyuki TAKAHASHI

愛知県立大学教育福祉学部、音楽教育学・音楽心理学

【要旨】

「ジャズ演奏者はテンションを含んだコードの聴取から、その土台となる基本的な和音を把握できる技能に優れている」という仮説について、ジャズ演奏者とクラシック演奏者を対象にした聴取実験によって検討した。実験課題は3和音を中心とした和声とそれにテンションノートを付加した和声の両者を比較し、その異同判断を行うものである。結果を分析したところ、クラシック演奏者群に比べてジャズ演奏者群の正答率が有意に高いことが示された。また、和音単独の刺激を用いて同様の実験を行ったところ、同様の傾向が見出された。これらは上記仮説を支持する結果であると言える。ジャズ演奏者のこのような聴取技能は、即興上の枠組みのひとつである楽曲の和声の効率的な把握において重要な役割を果たしているものと想像される。

研究発表２

【タイトル】

「『音楽づくり』における『即興的な表現』活動についての実践的研究」

'Action Research for Learning of Creative Music Making: Musical Improvisation in Elementary School'

【発表者】

明道 春奈　／　Haruna MYODO
広島大学大学院　教育学研究科　学習科学専攻
カリキュラム開発専修（教職高度化プログラム）　初等音楽科ゼミ

【要旨】

「音楽づくり」とは，小学校音楽科において「歌唱」「器楽」とともに位置づけられた一分野であり，「児童が自らの感性や創造性を発揮しながら自分にとって価値のある音や音楽をつくること」である。「音楽づくり」では，例えば「様々な発想をもって即興的に表現すること」「思いや意図を持って音楽をつくること」等を指導することが求められている。発表者は，児童の″様々な発想″を引き出し，児童が＜自由＞に表現できるようにするためにはどのような手立てが必要であるかを探究することを目的として，授業実践を行いながら研究を進めてきた。

昨年度は，小学校2年生において簡単なヴォイス・アンサンブルをつくる「音楽づくり」の授業実践を行った。本授業実践を通して，授業者が提示する表現例や，かかわり合いが生まれるような学習環境，活動における遊びの要素が，児童の発想や表現に影響することが明らかとなった。

昨年度の成果と課題をふまえ今年度は，未だ検討できていない高学年を対象とし，「音楽づくり」の授業実践を行うこととした。また，活動内容についても，未検討である「即興的な表現」に関する活動に焦点をあて，新たに題材を開発することとした。

本発表ではまず，発表者が現在小学校第5学年で行っている授業実践について，実践計画と設定した手立ての内容，そして，その設定の過程について述べる。さらに，実際にはどのような児童の発想，表現が生まれているかといった実践の途中経過について述べ，設定した手立ての適切性，今後の実践の可能性について考察する。

研究発表３

【タイトル】

「ジョン・ゾーン《コブラ》の作品性」

'John Zohn's Game Piece "Cobra": Its Concept as a Musical Work'

【発表者】

寺内 大輔　／　Daisuke TERAUCHI

広島大学大学院教育学研究科、作曲・即興演奏・音楽教育

【要旨】

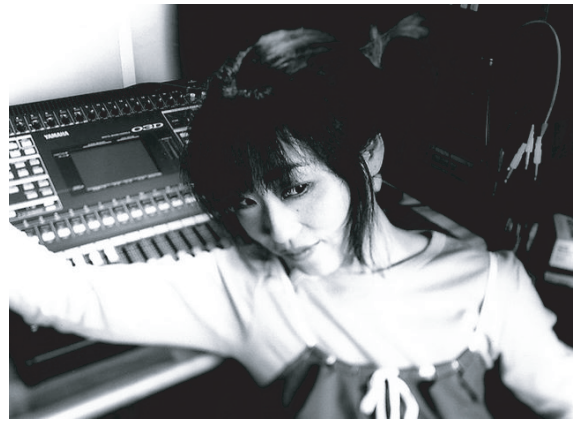
ジョン・ゾーン John Zorn の《コブラ　Cobra》（1984）は，10名程度の演奏者による集団即興演奏のための作品である。ゲームのような仕組みを持っていることから＜ゲームピース　game piece＞と呼ばれている。

しかしながら，《コブラ》では，楽譜に相当するものが書かれておらず，その演奏方法は，口承を中心として伝えられてきた。ルールが口承によって伝えられる以上，口承の過程にゾーン自身が関与しなければ，ルールが誤解されたり，あるいは故意に変えられたりすることは避けられない。そのため，《コブラ》は，世界各地に様々なヴァージョンが存在すると言われている。

様々なヴァージョンが存在し，実践されているにも関わらず，《コブラ》は，ゾーンの＜作品＞として認知されている。このような作品のあり方は，それまでの西洋芸術音楽や現代音楽の中には見られなかった。

本発表では，《コブラ》の実際や，ゾーン自身の言説を参照し，《コブラ》のアイデンティティを形成する特質に着目し，その作品性を検討する。

基調講演



【タイトル】

「音の観察と声のゆくえ」

'The Extraction of Sound and the Voice'

【講演者】

Haco

【プロフィール】

Haco（ハコ）

神戸在住。ヴォーカリスト、エレクトロニクス奏者、作詞作曲家、サウンドアーティスト、即興演奏家、スタジオプロデューサー。声やエレクトロニクスや身のまわりの日常音を有機的に融合させた作品づくりと演奏、ワークショップにいたるまで、自由かつボーダレスな活動をつづけている。

80年代に音響芸術を学び、After Dinnerを結成すると共に作品が国際的に評価される。透明感のある歌声と音響技術が融合した実験的ポップ感覚をつめこんだ楽曲によって、世界中にファンをもつ。

1995年より、声と電子楽器による演奏に加え、音響装置を用いた独自のパフォーマンスを展開。海外の革新的な音楽/アートフェスティバルから招待され毎年のように公演ツアーを行っている。

これまでに制作した5枚のソロアルバムやHoahio （with 八木美知依、恵良真理、Sachiko M)、Ash in the Rainbow（with 坂本弘道）などの共作CDが多数発売されている。その作風は各プロジェクトによって分けられており、歌、楽器アンサンブル、電子音、音響、環境音、即興コラボレーション、電磁波の収音にいたるまで、多岐にわたる。

1999年に創設したView Masters（現音採集観察学会）を起点にサウンドアートの文脈でのレクチャー、ワークショップにも精力的に取りくむ。

2005年には音響作品「Stereo Bugscope 00」がオーストリアのアルスエレクトロニカで入賞。2011年には歌と有機的なエレクトロニクスで構成されたソロアルバム「Forever and Ever」を国内（ディスクユニオン）リリース。

2012年、ドイツ（ベルリン）のCC N° 1 フェスティバルにて、”バイオテック・オーケストラ”のワークショップに講師の１人として参加。

2013年には、オーストラリア（パース）のTotally Huge New Music FestivalとICMC（インターナショナル・コンピュータ・ミュージック・コンフィレンス） でソロ公演。メルボルンのSonic Cityフェスティバルにて、走行する路面電車内で角田俊也と共に特殊なマイクを用いたサウンドパフォーマンスを行った。

2011-2013年「音虫眼鏡ワークショップ～即興の楽しみ方」を”Jazz Art せんがわ”フェスティバルにて実施。

また2005年より、フランス、オーストラリア、日本のコンテンポラリーダンス作品のサウンドデザインも手がけるなど、鋭い感性で活動範囲を広げている。

http://www.hacohaco.net

ラウンドテーブル

【タイトル】
「ソニック・リチュアルズ」（音の儀式）
'Sonic Rituals'

【発表者】
ガイ・ハリーズ 、ユミ・ハラ　／　Guy HARRIES , Yumi HARA
Music Performance & Production,
Performing Arts,
University of East London
Composer, performer, improviser

【要旨】
ユミハラ　ユミ・ハラ：voice, movement, found objects
ガイ・ハリーズ：electronics, voice, wind instruments, found objects
ユミ・ハラとガイ・ハリーズは声、found objects（楽器として使用されることを目的として作られたわけではない物）、エレクトロニクスなどを用いて音の儀式を即興演奏するデュオである。このデュオは出演依頼があるごとに音楽以外に由来するコンセプトに基づいて演奏することを求められてきた。例えばポストアポカリプティックなシナリオ、火の儀式、フロイト派精神分析的文脈における暗黒、未来的シャーマニズム、など。これらの演奏は毎回非常に異なるものであったが、演奏を重ねるにつれデュオとして音、動き、相互作用などの特有なスタイルを発展させてきた。
このデュオの主なテーマとして以下のものがあげられる：
・**即興演奏におけるドラマツルギー**：このデュオは即興演奏とは音だけでなく、照明、ステージング、動き、小道具など全てが演奏の一部であると考えている。これらすべてが即興演奏を構成するものであり、また音楽の一部でもある。
・**デュオの音の語彙**：声とエレクトロニクスのコンビネーション、声と管楽器のエクステンデッドテクニック、found objects、テープレコーダー、アナログシンセサイザー、コンタクトマイクによって拾われる音など。
・**音楽以外に由来するテーマ**に基づいて行う即興演奏。「儀式」というコンセプトが明確な大枠になっていて、その中で予期せぬ出来事が起こりうるという構造になっていること。
・**オーディエンスの解釈**が演奏に極めて重要な意味を持つこと。このデュオによって提示され、演奏される歌詞や音そのものに関しては特に物語や意味といったものは準備されていない。しかし演奏後、オーディエンスが自発的に語ってくる感想を聞くと、解釈の過程において彼らにとって何か重要な意味が彼らの中で創造されていることがわかる。
このプレゼンテーションでは、短いパフォーマンスのあと、このデュオの起源と演奏の方法について説明する。その後以下の点についてラウンドテーブルディスカッションを行う：
・宗教的な意味ではなく、パフォーマンスとしての「儀式」というコンセプトについて
・どのようにしてオーディエンスがこのパフォーマンスに関与するのか、たとえば認知、解釈、参加などといった点について
・音楽的経験の一部としての音以外のコンセプト：動き、視覚的小道具、言葉、物語性
・即興演奏の方法：コミュニケーション、持続音の関与、無意識的要素、意思決定

参考リンクとビデオ：
https://www.youtube.com/playlist?list=PL0EF495F00EA87205
http://migrorecords.com/GuyHarriesYumiHaraCawkwell
http://www.yumiharacawkwell.co.uk/
http://www.guyharries.com/

＜英語原文＞
Sound artists Yumi Hara Cawkwell and Guy Harries work as a duo, creating 'sonic rituals'. Using voices, found objects, electronic processing, field recordings, and nonlinear synthesizers, the duo's performances unfold through a process of improvisation. The structure of the performances, which is never premeditated, is inspired by the concept of ritual, imbued with intent and a sense of inevitability, yet allowing for risk and unpredictability to lead the scenario in new directions.
The duo met in the mid-noughties while completing their PhD studies at City University, and are now teaching colleagues at the University of East London. They found that they shared a common musical language, inspired by contemporary art music as well as the more experimental trends in rock and pop music. After a mesmerising first performance at a Transient Constellations event in London, they decided to continue this collaboration.
The duo has performed at various events in the UK (Cafe OTO, New Lexicons of Dark festival at Courtyard Theatre and Apiary Studios) and abroad (Druskomanija Festival in Lithuania). As part of these commissions, they have been asked to work with themes such as: fire rituals, darkness in the context of Freudian psychoanalysis, futuristic shamanism, and post-apocalyptic scenarios. Though these themes provide an initial inspiration, the meaning attached to these Sonic Rituals is always open to the audience's subjective interpretation.

研究発表４

【タイトル】

「電子音響音楽の音素材制作における即興演奏の影響について
－花園大学の担当講義『サウンドデザイン』履修者を対象とした試み－」

'The Creative Potential of Improvisation in Generating Source Material for Electroacoustic Music Composition:
Experience in 'Sound Design' Module at Hanazono University'

【発表者】

石上 和也　／　Kazuya ISHIGAMI
京都精華大学 ポピュラーカルチャー学部 音楽コース
電子音響音楽、コンピュータ音楽、ノイズミュージック

【要旨】

電子音響音楽とは、所謂テープ音楽と呼ばれているミュージックコンクレートや電子音楽、ライブ・エレクトロニック・ミュージックのことを指す。本研究でいう電子音響音楽の作曲とは、ミュージックコンクレートの手法を用いた、コンピュータベースでの作曲である。

筆者は、花園大学で講義「サウンドデザインI, II」を担当している。後期の「サウンドデザインII」では、五線譜や楽音での音楽表現からの開放を目標として、期末課題では電子音響音楽作品の制作をおこなっている。履修者は、音楽の専門教育を受けていない学生である。

筆者は、電子音響音楽を制作する上で最も重要な要素は、音素材であると考えている。特に、音楽教育を受けていない学生には、理論的に作曲をおこなうというよりも、直感的に「おもしろい」と感じる音の響きを探りながら制作していく事が適していると思われる。

昨年度の授業の進め方は、電子音響音楽の歴史や手法について等の講義をおこなったうえで、既存の音素材集を使用しての編集・加工をおこない、そして最終段階で作品作りをおこなっていたが、音の可能性に対しての気付きや音に対する興味を示しているようには見受けられなかった。

今年度の試みとして、学生自身で音の可能性を発見し、音に対して能動的に興味を抱くように、電子音響音楽の音素材制作の一環として即興演奏を取り入れた。

本発表では、授業観察と履修者のアンケート結果をもとに、即興演奏が音素材制作にどう影響したのか考察する。

研究発表５

【タイトル】

「コミュニティ創成における表現の即興性が果たす役割」

'The role of musical improvisation in community development'

【発表者】

沼田 里衣　／　Rii NUMATA

神戸大学大学院国際文化学研究科国際文化学研究推進センター、音楽療法

【要旨】

本研究は、障害者を含む多様な音楽的価値観や技術を持つ人々によるコミュニティ創成の場において、即興音楽が果たす役割を考察することが目的である。

音楽の即興性は、ジャズや現代音楽、様々な民族音楽に見られるだけでなく、音楽教育、音楽療法、コミュニティ音楽の領域でそれぞれの目的に沿って採用されてきた。教育や療法の場では、演奏技能の習得、対人関係の改善や心身の問題の解決を図ろうとする上で効果的であるとみなされてきたのである。一方で、コミュニティ活動においても音楽の即興性は様々に活用されているが、多様な技術や価値観を持つ者が音楽を行おうとする際に果たす意味という観点からはあまり注目されてこなかった。本発表では、筆者自身が行った実践報告を交え、音楽の即興性がコミュニティ創成に際してどのような機能を発揮しうるのかを考察する。

筆者は、2005年9月より音楽療法家、音楽家、知的障害者が共に即興演奏を行うことにより、新しい音楽の地平を開拓することを目標としたプロジェクト「音遊びプロジェクト」（明治安田生命社会貢献プログラム「エイブルアート・オンステージ」参加事業）を企画し、現在まで運営を行ってきた。この活動について研究を続けるなかで観察されたのは、自発性を重んじる即興音楽のあり方を追求した結果、突発的に生まれる互いに異質な価値観を認め合う環境が生まれ、ダンス、じゃんけんなど様々な要素を含む共演のあり方が共有され、さらにそれにより多様な人の参加が促され、関係性が拡大されて行ったという事実である。

こうした試みを経て、筆者は、2014年6月より表現形態を音楽に限定せず、美術や映像等に興味を持つ人を広く対象とした「知的な障害のある人とない人のコミュニティ創成プロジェクト：音とからだで遊ぼう！」と題した知的障害者と一般参加者のためのプロジェクトを新たに企画・運営した。その結果、約３ヶ月後の公演では、かくれんぼ、ドローイングや卓球を含めた多様な演目が生まれ、それとともに新たな関係性が生まれた。

以上の事例から、多様な参加者が集まるコミュニティ活動における即興音楽の可能性について多角的に考察する。

研究発表６

【タイトル】

「U::Gen LaboratoriumにおけるLeap Motion Controllerへの音楽的アプローチ」

'Musical approaches to Leap Motion Controller at U::Gen Laboratorium'

【発表者】

仲條 大亮　／　Daisuke NAKAJYO

国際基督教大学アジア文化研究所、音楽学

【共同発表者】

由雄 正恒　／　Masatsune YOSHIO

昭和音楽大学、作曲

【要旨】

U::Gen Laboratorium（以下U::Gen）は東京、大崎のイベントスペースl-eで概ね隔月から四ヶ月に一度の頻度で開催されている実験ラボ形式のライブイベントである。主催・企画制作を大谷安宏、由雄正恒が担当し、2012年3月30日の初回から現在まで12回開催され出演者は延べ50組を超える。実験ラボ形式とは、完成した作品のみならず、必ずしも完成した作品でない場合やワーク・イン・プログレスである場合でも上演を行い、出演者は作品の解説や課題の説明を加え、他の出演者やオーディエンスと活発な議論を行うことを意図している。こうしてU::Genで上演された作品は他の上演機会へと持ち出され、また反対に、他の機会で上演された作品がU::Genへ持ち込まれ再考されるなど、U::Genの継続は作品成立過程を主体とした議論の場を提供するだけでなく、出演者の継続的な手法の探求にも寄与してきた。

各回には何らかのテーマが与えられることもあり、基本的には出演者それぞれの問題意識や技術的課題を追求していく中で次へとつながる共通の発見があった場合にテーマ的な企画が立てられる。例えば第5回（2012年11年18日）では池田拓実が会場内のマンホールに振動スピーカーと銅鑼を設置、その効果が大きかったことから第6回（2013年3月22日）はサブタイトルを「突然マンホール」として出演者全員がマンホールを使用した演奏を行っており、以後もマンホールを利用した演奏はたびたび行われている。

Leap Motion Controllerは最初The Leapとして2012年5月に発表された3Dモーションキャプチャーを行うコントロールデバイスで、主なディベロッパーはゲーム関連が中心になっている。2013年にはヒューレット・パッカードのノートPCにも搭載されたが、音楽的な用途のアプリケーションは決して多いとはいえない状況だった。そこでU::Genでは第10回（2014年1月26日）、第11回（2014年3月30日）の二回にわたってLeap Motionを用いた作曲・演奏についての試みが公開、議論された。この試みは各回共通して由雄正恒、大谷安宏、岡本大典の三名によって行われた。本発表ではこれら三者三様の取り組みの目的、手法、結果を整理し、コントロールデバイスを用いた音楽の可能性として、特に作曲と即興という観点からの考察を行う。

研究発表 7

【タイトル】

「その場で楽器を作って演奏したっていいじゃないか」

'Improvisational Performance with Making Musical Instruments'

【発表者】

長嶋 洋一　／　Yoichi NAGASHIMA

静岡文化芸術大学（SUAC）/ASL
http://nagasm.org

【要旨】

筆者はこれまで、Computer Musicやメディアアートに関連する研究/システム開発/作曲/公演/教育などの活動を続けてきた。

2006年には「GHIプロジェクト」(楽器が光ってもいいじゃないか)のコンセプトを提唱し、インドネシアの民族楽器"Kendang"を改造して新楽器"Cyber Kendang"を制作し、情報処理学会音楽情報科学研究会およびICMC2007で発表するとともに、SUACメディアアートフェスティバル2006、NIME2007(New York)で実際に新作公演に活用した。

2009年には「触らない楽器」というコンセプトの新楽器"peller-Min"を制作したが、2重リング計16個の距離センサとともに設置した、テーブル状の計16個の反射型センサ(空中揉み揉みでサウンド生成)は、ステージ上で演奏者を怪しい青色に照らす、というコンセプトの部分で「GHI」を継承しており、インターカレッジ2009特別コンサートおよびMOM2010で実際に新作公演に活用した。

2014年には構想を継承した新楽器"GHI2014"を制作した。2つの正八面体、計24個の稜(断面は正方形)の4面に計864個LEDが並んで光り、6個の超音波センサによりテルミン風に演奏する。3Dプリンタの流行を尻目に「バルサ材で試行錯誤の手作り」という「ものづくり」の原点を確認しつつ、海外ツアーに分解持参(現地組立可能)できる小型軽量なものとした。ネオジム磁石による「組み立て」作業は、それ自体が即興パフォーマンスであり、最初の作品(あくまで「demo」というタイトル)は、テーブル上に拡げた部品を順に組み立てていく演出とともに、SUACメディアデザインウイーク2014、京都精華大学、京都市立芸術大学でのワークショップのデモ公演に活用した。

本稿では、OMMF2014のライブコンサートでのパフォーマンスに向けて、この"GHI2014"と、スケッチング(物理コンピューティング)コミュニティの仲間がKickStarterでクラウドファンディングにより実現した"LittleBitsSynth"と"Clyde"の2つのシステムを改造して組み合わせた新作の詳細とメイキングについて報告する。

特別講演

【タイトル】

「即興　現在から未来へ」

'Improvisation from Now to the Future'

【講演者】

大野 松雄　／　Matsuo OHNO

聞き手：由良泰人

【プロフィール】

大野松雄（おおのまつお）

電子音響デザイナー。1930年東京神田生まれ。府立六中(現・都立新宿高校)を経て、旧制富山高等学校中退。文学座、ＮＨＫ東京放送効果団を経て独立。63～66年ＴＶアニメ『鉄腕アトム』の音響デザイン。小杉武久がアシスタントとして参加。

1930年に東京で生まれた大野松雄は文学座を経て、数多くの映画と黎明期のテレビで音響制作に携わり、音響デザイナーとしての地位を固めた。アニメーション番組「鉄腕アトム」では電子音響を用いた効果音を制作し新しい音響表現を産み出した。その音は現在にも影響を与えている。

その後つくばEXPO’85、未来の東北博覧会(87)、アジア太平洋博覧会福岡(89)など博覧会の音響デザインを手がけ高い評価を得ている。商業分野だけでなく個人の映像作品、アニメーション作品、記録映画、科学映画など幅広いジャンルでも音響を担当し、小杉武久氏主催のタージ・マハル旅行団の記録映画「旅について(72)」では自ら制作した。近年は音楽家のレイ・ハラカミのアルバム「レッドカーブの思い出」に史上最高齢のリミキサーとして参加、鉄腕アトムの音響をまとめた「鉄腕アトム音の世界」や音響作品「そこに宇宙の果てを見た」などが再発売され、新作として「大野松雄の音響世界(05)」「YURAGI#10(11)」を発表。

2009年には草月ホールにて初のコンサートとなる「大野松雄～宇宙の音を創造した男」が＜東京の夏＞音楽祭にて開催されるなど、音の作品が幅広い層に支持されている。

またライフワークとして知的障がい者施設である社会福祉法人大木会もみじ・あざみ寮に深く関わり、記録映画の制作から寮生による劇での音響制作など、公私を超えた関係を40年以上築いている。

コンサート

大野 松雄、Haco ／　Matsuo OHNO , Haco

演奏発表

【タイトル】

「Feedback ：電子音楽のアコースティック音楽　(unplugged electronic music)」

'Feedback:unplugged electronic music'

【発表者】

Jai（高橋 哲男） ／ Jai (Tetsuo TAKAHASHI)

個人としてアクースモニウム作品制作やMax、モジュラーシンセなどを使用したパフォーマンスのほか、即興アンビエンユニット　Jai。

Machine、ギター、ヴァイオリン、チェロによる即興バンド　Corps sans Organeなど即興ユニットに複数参加。

【要旨】

電子音楽はスピーカなど信号を増幅することによってのみ「音」として認識できない。

本当に電子音楽のアコースティック表現は不可能なのだろうか？　Unplugged Electronic Musicはどうにかできないだろうか？

一人の即興演奏のフィードバックというテーマとともに演奏を試みてみる。

研究発表８

【タイトル】

「通奏低音奏における即興行為と創造的演奏性」

'Improvised act and creative performance in thorough bass playing'

【発表者】

三島 郁　／　Kaoru MISHIMA

京都市立芸術大学、音楽学、チェンバロ奏者

【要旨】

通奏低音は、西洋バロック期のアンサンブル音楽において、バス声部を受け持つパートである。この演奏を担当するのは、バスのラインのみを奏するチェロやファゴットなど低音の弦楽器や管楽器、そして和音などを加えて演奏するリュートやギターなどの撥弦楽器とチェンバロやオルガンなどの鍵盤楽器である。とりわけ鍵盤楽器では、バスのラインとともに書かれた数字を読み、和音を加えたり、さまざまな装飾音を施したりして演奏するのが慣習となっており、そこには即興的な演奏が求められる。

ただしこれは厳密には即興行為ではない。奏者は、「本番」で初めて音をつけるのではなく、たいていは一人での練習時に和音や簡単な装飾音をつけた後、アンサンブルでのリハーサルで、旋律楽器のラインを聴きながら、また旋律楽器奏者と相談しながら、記譜されていない音をつけたり省いたりするのである。むろんそれがある意味事前の準備を含んでいたとしても、そしてその結果その行為を部分的に手に覚え込ませることがあったとしても、「記譜されていない」音を、奏者が楽譜上に書き留めずに、演奏することに変わりはない。

また奏者本人にも必ずしも明確な音楽的意図があるとは限らない。すなわち、数字にしたがって加えた一音一音すべてが音楽上計画された上で構築されたものではなく、奏者の手の癖も含めた身体上の都合や「定型」のようなものも大きく関係している。

このような通奏低音奏は、18世紀にも多くの教本や理論書が出版され、その理論と実践については多くの指南が書かれた。その内容も、必ずしも音楽上の必要性から指示されているわけではない。むしろどのように鍵盤上に手を配置するのかという基本から、和音を手に覚え込ませることが最も重要課題であった。

本発表では、通奏低音付き作品の現代の演奏録音を分析し、通奏低音奏において記譜以外の部分がどのように演奏されているのか、またそれがどのような意図であるのか、そして演奏中の創造行為がどのように生み出されるのかについて、明らかにする。その際、18世紀の通奏低音にかんする資料における即興教授法が、どの程度いかされ、あるいは逆にそこから逸脱しているのかについても考察することで、演奏行為の身体的意味を問いたい。

研究発表９

【タイトル】

「音楽大学における即興音楽教育～ソルフェージュ授業の実践報告」

'The role of improvisation in higher music education - a research in solfège class'

【発表者】

橋本 知久　／　Tomohisa HASHIMOTO

アトリエ・ラーノ代表、時間芸術家（作曲・振付・演出）

【要旨】

発表者が2013年度に愛知県立芸術大学音楽学部で行ったソルフェージュ（即興クラス）の授業内容の報告とともに、五線記譜を中心とするソルフェージュ教育では扱いきれない音楽の基礎能力の開発に即興という視点からアプローチすることの有効性について検討を行います。

楽譜に基づいた楽曲の演奏では高度な技能を有する学生でも、即興演奏をしたことがなかったり、苦手意識を持っている人が多くみられます。この授業ではさまざまな即興演奏の方法論を紹介、実践してもらうことで、自分なりの即興演奏をするための足がかりとなるような型を学んでもらいました。

1年次の基礎クラスを終えた学部２年生を中心に編成された、声楽、器楽、作曲などの専攻が混ざった応用クラスで行った半期の授業プログラム。具体的な内容としては教会旋法を使った自由歌唱、機能和声を使った即興での旋律演奏、リズムサークルによるグルーヴ、陶器を使った音色に着目した音響構成、ハンドサインによる即興アンサンブルの指揮ほか。

音楽理論や音楽を把握し分析する能力、メロディー創作やアンサンブル力などといった各要素を統合するための実践的なプラットフォームとしてソルフェージュ授業を構成することを目指しました。それぞれの教授方法の課題研究は今後の機会に譲り、今回は発表者の考える即興を軸とした音楽教育の概要とその意義について考えをまとめたいと思います。

日本音楽即興学会　設立趣意

音楽における即興性は、あらゆる音楽文化に見られる現象だと言ってよいでしょう。唯一例外だったのは、記譜に大きく依っていて即興性を少なからず排除していた西洋近代の音楽文化だけと考えられます。現在では、ジャズ、ロック、現代音楽、キリスト教オルガン音楽、インドやイランなどの民族音楽など多くの音楽領域において即興は大きな意味を持っています。

フリー・インプロヴィゼーションを提唱したデレク・ベイリーが「インプロヴィゼーション」という本を書いたのは1980年のことですが、その頃から民族音楽学、音楽学、音楽療法等の領域で、音楽即興に関する研究が増え始め、以前よりも実りが期待できそうなこの領域を切り開いていきそうな研究の方向を提示するような書も多く出現してきています。もちろんベイリーの考えも、現在の音楽に少しずつ影響を与え続けています。またポストモダンの哲学などの状況も、こういった音楽即興を考えるための自由な思考の空気を用意してきたことでしょう。

こういった状況で、われわれに必要なのは音楽即興を研究、実践両面で自由かつ学術的に議論できる場ではないかと思い、本学会へのご参加をみなさまに呼びかけます。

2008年2月21日
2008年9月14日修正

若尾　裕

入会のご案内

以下の入会申込必要事項をご記入のうえ（jasmimtea@yahoo.co.jp）に件名「入会申込書」でお送りください。

----------入会申込事項----------

日本音楽即興学会に入会申し込みます。

●おなまえ（ふりかな）：
●お名前（漢字）：
●郵便番号：
●住所：
●所属：
●専門分野／活動内容：
●Eメールアドレス：
●電話番号：
●（大学院生を除く）学生ですか？　Yes or No
（学会費は、Yesの場合3000円、Noの場合5000円となります）
●入会申込みされ入会を承認された方は、会員ML（メーリングリスト）に登録します。
　上記メールアドレス以外のアドレスで、MLに登録されたい方は、その旨お書き添えください。

---------入会申込事項ここまで--------

会員MLのURLは、http://www.freeml.com/jasmim_mint です。
登録メールアドレスにメールが配信されますが、上記URLでも過去のメールが閲覧できます。
ML参加者のメールアドレスは公開されません（投稿すればメールアドレスは公開されます）。

＜振込口座＞
学会費（年額5000円です。ただし学生（大学院生除く）は年額3000円です）は、次の振込先へお振込ください。

一般銀行から振り込む場合
ゆうちょ銀行
預金種目：普通
店名：四三八（読み　ヨンサンハチ）
店番：438
口座番号：5388888
口座名：ニホンオンガクソッキョウガッカイ

ゆうちょ銀行から振り込む場合
ゆうちょ銀行
記号：14340
番号：53888881
口座名：ニホンオンガクソッキョウガッカイ
（ATMの場合「14340-*-53888881」真ん中の1桁*の入力は不要です）

jasmim journal 投稿規定

学会誌について
ジャスミン・ジャーナルは、日本音楽即興学会の発行する査読付き学会誌で、広く音楽即興に関する原著論文その他の記事を公開する媒体です。当面、ウェブ版のみを発行します。学会誌で表明される見解は著者によるものであり、学会全体の、あるいは学会誌編集委員会のものではありません。

1 投稿資格
・本誌への投稿者は本学会員に限ります。ただし編集委員会が特に必要と認めた場合には非会員の寄稿を受けつけることがあります。
・「論文」の投稿については、採否にかかわらず会員一人あたり1年につき1本を限度とします。

2 投稿の種類
・本誌への投稿には、音楽即興に関する独自の知見を論述する「論文」の他に、「研究報告」(論文に至る前段階の中間報告や調査報告、実践報告など)、「批評」(書評・演奏会評・CD評など)、「討論」(掲載記事へのコメント、反論など) があります。
・本誌への投稿は未公表のものでなければなりません。本誌ならびに他で公表されたものの翻訳についても、特に本誌に掲載する価値があると編集委員会が認める場合を除き、原則として受け付けません。

3 執筆要領
3.1 使用言語
・日本語または英語。

3.2 書式について
・原稿は電子データでのみ受けつけます(→5)。横組でウェブに掲載されることを前提に執筆してください (ただし掲載の体裁は変更されることがあります(→7)。プレイン・テキスト・ファイルを提出してください。
・「論文」「研究報告」「批評」については本文中にはリンク参照は不可です。
・注は後注方式としてください。注にはリンク参照は可です。
・「論文」は別に定める「書式の原則」 (別掲) に従って執筆してください。「研究報告」「批評」「討論」も必要な場合は同原則に従ってください。

3.3 分量 ・論文は、日本語の場合20,000字、英語の場合8,000語以内とします。さらに、両方の言語で、題名 (タイトル) の訳と800字あるいは300語以内の要旨を付けてください。
・研究報告、批評、討論については、6,000字、2,400語以内とします。

3.4 (テキスト以外の) 画像・音声・映像 (以下「バイナリ」) について ・バイナリ (譜例・写真・図・表などの画像や音声、映像) は必ず本文中で言及されていなければなりません。論の展開に必要不可欠なバイナリを適切に使用してください。 ・バイナリにはすべて通し番号とキャプションを付けて、それらのリストを文字原稿末尾に記載してください。 (通し番号例：B001, B002, B003……) ・バイナリデータは、それぞれ別個のファイルとして保存し、番号・キャプションとの対応が明確であるようなファイル名を付してください。 (ファイル名例：B001.jpg, B002.wav, B003.mov……)
・非常に特殊と思われるデータ形式を使用する場合は、編集委員会にお問い合わせください。
・ (特に音声について) 音声は、WAVファイル (44100Hz,16bit,stereo) で提出してください。著者が提出した音声ファイルのアップロードは本学会が行います。MP3 (128kbps) にクオリティを落とした上アップロードします。将来、同クオリティを上げ、音声データをアップロードし直すことがありますが、論文提出時の音声データを修正・差し替えることはできません。
・ (特に映像について) 映像ファイルについてはその時の編集委員会のインストラクションに従ってください。映像データのウェブ上の再現手段は、利便性、信頼性、費用などの面により、当面YouTubeを利用します。映像の再現クオリティは、YouTubeの機能に依存することをご了承ください。なお、映像は1データ10分未満としてください。

4 著作権について 「著作権およびCCLに関する規定」をよくお読みになり、それに従ってください。著作権譲渡契約書等を添えて、原稿を送付してください。

5 原稿の送付
・すべての原稿データは、ファイル・サイズに問題がなければメイルに添付して、別掲の編集委員会あて送付していただいてかまいませんが、その場合も、CD-RやDVD-R、フラッシュメモリなどに記録したものを1部提出してください。なお、原則として原稿データと媒体は返却しません。著者の側で、すべてのデータの複製を保管しておいてください。

6 原稿の採否
・原稿は、編集委員会が採否を決定します。特に論文については、2名以上の査読者が検討し、文書による査読報告を受けて、編集委員会が採否を決定します。原稿受領から採否の決定まで、最長3カ月を想定していますが、それよりも時間を要する場合には投稿者にその旨通知します。掲載決定に際して、編集委員会は著者に修正を求めることがあります。

7 校正
・発行に先立って著者に校正を1回していただきます。ただし、編集作業に伴うミス以外の字句の修正や挿入・削除をおこなってはなりません。また、体裁上の修正も、原則として許されません。ジャスミン・ジャーナルではCSSを個々の記事のhtmlファイルに埋め込まず別ファイルとすることで、全体の体裁の変更・修正を容易にすることを原則としていますので、基本的にはその時点でのスタイルにしたがってください。

8 締め切り日
毎月末。翌月から編集委員による分担と予備的査読、それに基づく査読者の依頼といった作業を始めます。月初めに投稿されても、基本的に翌月まで編集委員会は具体的作業にはかかりませんので、ご留意ください。

2009年7月7日制定・施行
2009年9月30日修正
2009年10月3日修正
2013年11月10日修正

原稿の送り先：
〒739-8524 東広島市鏡山一丁目1番1号 広島大学教育学研究科 (教育学部G棟203号室) 寺内大輔研究室
Eメール：terauchi@hiroshima-u.ac.jp

日本音楽即興学会　会則

当会の会則です。会員になられる方は、よくお読みください。

1.本会は日本音楽即興学会（The Japanese Association for the Study of Musical IMprovisation）と称する。略称はジャスミン(JASMIM)とする。

2.本会は、音楽の即興性の研究ならびに、即興性を持つ音楽の実践に、たずさわる人々の交流を促進し、それらの発展に寄与することを目的とする。

3.本会は、会員相互の自由な意見交換の場とし、世界に開かれた学会を目指す。組織運営は、形式的運営に流れる事なく、オープンかつ民主的なものとする。

4.本会は次の活動を行なう。
(1)年次総会、研究大会等の開催
(2)研究誌等の発行
(3)内外の諸団体および個人との交流
(4)その他、本会の目的を達成するのに必要な活動

5.本会の会員は、個人会員とし理事会が承認した者とする。会費の額は理事会において決定する。

6.本会には次の役員をおく。
(1)理事長1名
(2)理事若干名
(3)監事1～2名
各役員の任期は2年とし、連続して3期の再々任はできないものとする。
ただし前任期の理事は監事には選ばれないものとする。

7.本会には次の会議を設ける。
(1)総会
(2)理事会
(3)委員会（必要に応じて設置）

8.総会は、会員によって構成され、本会の最高議決機関である。総会の議決は出席した会員の過半数による。ただし、会則の変更、本会の解散は、出席した会員の3分の2以上の同意による。

9.理事は総会で互選する。理事は理事会を組織して会務を処理する。

10.理事長は理事会で互選する。理事長は本会を代表して会務を処理する。

11.監事は総会で互選する。監事は会計を監査する。監事は理事会に出席して意見を述べることができる。

12.本会は必要に応じて、各種の委員会を設置できる。委員は理事会が会員のうちから指名する。

13.会議や連絡等は、可能な範囲においてインターネットを積極的に利用する。

14.本会の会計年度は、4月1日から翌年3月31日とする。

2008年9月14日制定・施行
2012年9月22日改訂
2013年11月9日改訂

大会実行委員会
落晃子（委員長）、石上和也、西田彩、寺内大輔、寺尾孝太、ユミ・ハラ、岡崎香奈、若尾久美

学会役員・委員
●理事（2013年4月1日から2015年3月31日まで）
寺内大輔（理事長／広島大学）、寺尾孝太（岡山市立岡輝中学校）、若尾久美（音楽家）
岡崎香奈（神戸大学）、ユミ・ハラ（イーストロンドン大学）

●監事（2013年4月1日から）
三宅博子

●編集委員会
岡崎香奈（委員長）、今田匡彦、中地雅之、沼田里衣、三宅博子、若尾裕

●広報委員会
ユミ・ハラ（委員長）、寺尾孝太、若尾久美

●選挙管理委員会
三宅珠穂（委員長）

●事務局
三宅珠穂（事務局長）

日本音楽即興学会 第6回大会プログラム・抄録

発行：2014年12月13日発行
編集：日本音楽即興学会2014年度大会実行委員会
Eメール：jasmimtea@yahoo.co.jp
WEBサイト： http://jasmim.net/